

## 街の女マギー

ステイーブン・クレイン作

牧草 泉

三.

ジミーと老婆は、長い間、廊下で耳をそばだてていた。ざわめきのような人の話し声がかすかに聞こえる。乳飲み子が目を覚まして悲しそうな声で泣いている。離れの廊下や部屋の間を踏みつける足音。通りから聞こえてくる嘎れた叫び声。敷石の上をガラガラと音を立てて通り過ぎる車輪の響き。それを圧するかのようには響いてくる女の子の金切り声と母親のわめき声、それは次第に小さくなって弱々しい呻き声と押しつぶされたような低いつぶやきに変わっていった。

肌がカサカサの老婆は、すぐに思うままに上流の老婦人に変身する術を持っていた。彼女は単調なメロディを奏でる小さなオルゴールを持っていて、誰かが希望すれば、「ゴ

ッド・ブレス・ユー」というセリフにいろいろな形容詞をつけて熱っぽくしゃべった。毎日、彼女は五番街の石畳の上に両足をお尻の下に曲げ込んで、薄気味悪い格好でうずくまり、偶像のように座り込んだ。こうして、ほんのわずかな銅貨を手に入れるのだ。その銅貨は遠くに住んでいる見知らぬ人々が恵んでくれるものだった。

あるとき、一人の女性が歩道に財布を落としたことがあった。すると、この老婆は、それを拾い上げると、すばやく外套のうちに隠した。警察に捕まったとき、老婆はその女性をひどくのしって、辟易させた。それだけにとどまらなかつた。リユーマチのためにひん曲がつた醜い足で、凶体の大きいお巡りを蹴り上げてたじたとさせたものだった。

この老婆が、「警察なんて糞食らえ！」と言うときは、このときのお巡りの振る舞いを思い出して言っているのだ。「あら、ジミー、これはひどいもんだね」と、彼女は言った。「ちよつと、ジミー、いい子だから、ビールを一杯買ってきておくれ。もし、母ちゃんが一晚中騒ぎ立てるんなら、ここで寝てもいいからね」

ジミーはブリキの缶と七セントの金を受け取ると、街へ出て行った。一軒の酒場の横木戸から入ると、カウターのほうに歩いていった。そこで彼はブリキ缶と銅貨を高く差し上げた。すぐに二本の手が伸びてそれを受け取った。

やがて、同じ二本の手がビールが入ったブリキ缶を下ろした。ジミーはそれを手にすると店を出た。

戻ってくる途中で、ジミーはあの煤けたドアの前で、よろよろと歩いている人影を見た。それは父親だった。ドアの前をおぼつかない足取りで行ったり来たりしている。

「おい、そのブリキ缶をこつちへよこしな」と父親が言う。「いやだよ、やめとくれよ！ これはお婆さんのものなんだよ。取り上げるって卑怯だよ。いやだつ」と、ジミーは叫ぶ。

父親はジミーからブリキ缶を無理やりに取り上げた。父親は両手でそれをつかむと、口元に持つていき、唇を缶の縁にベタリとくっつけて頭をのけぞらせた。やがて、毛深い喉が膨らんで顎の近くまで伸びる。父親は喉を激しく上下させると、あつという間にビールを飲み干した。

父親はほつと一呼吸すると笑った。そうして空っぽになったブリキ缶をジミーの頭に投げつけた。

ブリキ缶がカラカラと音を立てて通りに転がった。ジミーは大声を上げると、父親の向う脛を何度も蹴った。「なんてことをするんだ？ 婆ちゃんが怒るじゃないか。どうするんだよ？」彼は通りの真ん中に逃げた。父親は追っかけてこなかつた。父親はドアのほうによろめきながら歩いて行った。「今度、ひっ捕まえたら、た、たじゃおかないぞ」と、大声で言うのと訳のわからないことを喚きながら立

ち去った。

その日の夕方、ジミーの父親は酒場に入り浸りで、カウターに寄りかかって、ウイスキーを飲んでいたので。そうして入ってくる人に向かって誰彼かまわず、秘密でも打ち明けるように話した。

「俺のうちはまったく地獄だよ。ひどいんだ！ 俺がこうして、ここにウイスキーを飲みにやってくるのはなぜか知っているかね？ うちにはひどい暮らしで、いたたまれないからさ」

ジミーはドアの近くで長い時間をやり過ごす、用心深く言うようにして建物を通っていく。老婆の家のドアをそつと窺いながら通り過ぎた。やがて自分の家の前まで来るとふと立ち止まって、耳を傾けた。母親が、部屋の中を動き回っている音が聞こえた。彼女は時々火を噴くような怒りを父親に爆発させながら、悲しげな声でぶつぶつ呟いている。父親は床に倒れ込んでいたようだった。

「一体全体どうして、お前さんは、ジムに喧嘩するなつて言わないの？ いらいらするよ、本当に。ぶん殴つてやりたいよ！」と、母親が急に八つ当たりするように怒鳴った。父親は酔っ払いの無関心さでなにかつぶやいている。

「へエー、何をお前はいらいらしてるんだ？ どうしたんだよ。何をぶつぶつ言つてんだよ？」

「あの子が服をやぶつちまうのよ、あの腕白もの！」と、

母親が怒り狂ったように叫んだ。

父親は我慢の角が折れたようだった。「うるさい！」と怒鳴った。ドアがガチャンと鳴って、何かが砕けたようだった。ジミーは半ば叫びそうになるのをぐっと堪えて、あわてて階段を駆け下りた。降りたところで立ち止まると、彼はまた耳をそばだてた。わめき声、罵り声やうなり声、金切り声が入り混じって聞こえてくる。まるで戦争でもあっているかのようだ。その合間を縫って、家具の割れる激しい音が聞えてくる。ジミーの目は、二人のどちらかに見つかるんじゃないかという恐怖心で、ぎらぎら輝いていた。

物見高い顔があちこちのドアから現れて、ひそひそ話が行き交った。「ジョンソン親父がまた暴れているんだよ」

ジミーは騒ぎが収まるまでそこに立ち尽くしていた。長屋の住人たちはみんなあくびをしながらドアを閉めた。

やがて、ジミーは豹の狩人のように用心深く腹ばいになって階上上がった。苦しそうな息遣いが破れた羽目板から漏れてくる。彼は、恐怖心で震えながらドアを押し開けて中に入った。

暖炉の炎が、むき出しの床やひび割れして染みがついた漆喰の壁、横転した家具や壊れている家具を赤く照らしている。部屋の真ん中では母親が眠っている。片隅では、父親のぐったりした体が椅子から横様にぶら下がっていた。ジミーはそつと部屋に入った。彼は両親が目を覚ますの

「ジミー！ ジミー！ どこ？」ひそかに呼ぶ声があった。

ジミーはびっくりして飛び上がった。妹の瘦せかけた白い顔が、ドアから覗いていた。彼女は床を這うようにして彼の傍に寄ってきた。

父親は身動き一つすることなく横たわっている。依然として死んだように眠りかけている。母親は眠れないのか、ひどく寝返りを打っている。胸をぜいぜい言わせながら、今にも息が止まりそうだった。

窓の外には赤く染まった月が薄黒い屋根を照らし、遠くには川の水が青白く照り返っている。

みすぼらしい服をまとった女の子は震えていた。顔は泣いていたせいかやつれていた。でも、目は恐怖で異様に光っている。女の子は小さな震える手でジミーの腕にしがみついた。二人は部屋の片隅で抱き合った。二人の目はいつしか憑かれたように母親の顔を見入った。

二人は、母親が少しでも目を覚ますと、悪魔が床から現れると信じていた。二人はうずくまったまま、胸を波打たせながら疲れ果てて横たわっている母を見つめていた。外では夜明けの青白い霧が窓に忍び寄ってきて、窓ガラスを濡らし始めた。

#### 四

赤ん坊のトミーが死んだ。彼はちっぽけな棺に入れられ

ではないかとびくびくしていた。母親の大きな胸が苦しうに波打っている。ジミーは立ち止まって、母親を見下ろした。その顔は酒のために真っ赤に充血して膨れ上がっていた。黄色いまつげが青い目蓋に影を投げかけている。もつれた髪の毛が額の上に縮れて降りかかっている。口は食いしばったままだ。たぶん喧嘩をしていたときの憎しみそのままの形相で眠りについたのである。赤みがかったあんな腕は頭の上におかれている。それは悪者が思う存分相手をやっつけて疲れ果てて眠りこけたような寝姿だった。

ジミーは母親の上に屈みこんだ。母親が目をあけやしないかとびくびくしている。怖さのあまり目をそらすことができずじつと見つめている。まるで魔物に指示されたように母親の不気味な顔の上にかがみ込んでいた。すると突然母親は目を開けた。ジミーははつと驚いて、体中の血を塩に変える力を持っているかのように見える母親の表情をじつと見詰めた。彼は突然大声をあげると後ずさりした。

母親はしばらく身をもがいた。そうして、まるでまだ喧嘩をしているかのように両腕を頭の周りに振り動かしたが再びいびきをかき始めた。ジミーは物陰に隠れてじつと見詰めていた。

母親が目を覚ましたのを知ってジミーが大声を上げたとき、隣の部屋で物音がした。彼は暗闇の中に這いつくばって隣の部屋のドアを凝視した。ドアのきしむ音が聞こえた。

マギーとジミーは生き延びた。ジミーの世間知らずの眼差しは少年時代に偏ってしまった。彼は屈強な若者になった。彼は数年間仕事もしないで荒んだ生活をした。その間にせせら笑いは彼の体に染み付いてしまった。彼は貧民街で人間の性格を学んだ。そうして人間の性格は以前に思っていたようにやはりよくないんだと思った。

彼は世間を敬う気持ちはまったくなかった。彼には世間が壊してしまった理想など全く目に入らずに育ってきたのだ。彼はたまたま、伝道教会に行ったことがあった。そのとき、一人の男が「あなた方は」と説教をしている場面に出くわした。彼は理由もなしに、自分の心をかたくなに鎧で閉ざしてしまった。聴衆がストーブで暖をとっているとき、その男は彼らが主と共にいる状況を想定して語り続けた。彼ら罪人のほとんど自分が犯した罪の深さに苛立っている。彼らは慈善のストーブ・チケットをもらおうと待ち望んでいたのだ。風の精の言葉を解する人であれば、その教師と聴衆の間にやりとりされる対話の一部を聞くことができたにちがいない。「あなた方は祈りが足りないのだ」と教師は言う。するとその声を解することができる人であれば、「ストーブはどこにあるんだ？」という問いがみすぼらしい

身なりの聴衆の口から飛び出してくるのが分かったにちがいない。

ジミーは一人の友人と後ろの席に座って、自由に振る舞うイギリスの紳士のように、自分たちに関係のないことを語り合っている。二人は喉の渇きを覚えて出て行ったが、二人とも教諭師とキリストがごちゃ混ぜになって区別がつかなくなっていた。やがてジミーは望むものがあまりにも遙か彼方にしかないのを知って不機嫌な表情になった。

友人は言った。「もし神に出会うことがあったら、百万ドルとビール一本をくれて言うんだ」と。

ジミーが長いことやっていることといえば、街角に立つて移りゆく世の中を眺め、美しい女性が通り過ぎていくたびに真っ赤に燃えるような夢を見ることだった。彼は街角の交差点あたりで男たちを脅迫することもあった。彼は街角に立っているときは生き生きとしていた。彼はそこで世の中の移り変わりを体感していた。

ジミーは身なりのいい男たちに対してはひどく敵対意識を持った。彼にとつて身なりの良さは心の弱さを象徴していたし、素敵なコートはすべてその心の弱さを隠蔽するものだった。彼と彼の仲間立派な服を着ている男たちを支配するいわば王様だった。なぜなら、男たちは威圧されたり嘲笑されたりするのをひどく恐れていたのだ。とりわけジミーはキリスト教徒や、洋服のボタン穴に貴族の証であ

る菊の花を飾っている男たちをひどく蔑んでいた。ジミーは「俺はあいつらよりは優っているんだ」と思っていた。彼は悪魔も世間の有力者もちつとも怖くはなかった。ジミーは、ポケットに一ドルもあれば、生きていくという満足感でいっぱいだった。

ジミーは働きたいと思うようになった。父は既に亡くなっていた。母親はその日暮しのような毎日だった。彼は荷馬車の御者になった。彼はよく働く二頭の馬と大型の馬車を与えられた。彼は下町の混雑する通りに入っていく、警察官に悪口雑言を浴びせかけることを覚えた。警察官も御者台に上がり彼を引きずり下ろして殴りつけることがあった。彼は下町で激しい争いが起きると毎日自ら乗り込んでいった。

ジミーと友人の車がたまたま後列にいるときは、騒ぐことなく足を組んで見渡していたが、歩行者が彼の馬の鼻先をくぐり抜けようとするときは大声を上げて制止した。しかし、彼は給料日が近づくと大声を上げることもなく静かにパイプを煙らしたものだ。

自分の馬車が先頭について騒動に巻き込まれたとき、彼はすばやく喧嘩に加わった。御者台の御者たちの間で喧嘩が起きているとき、彼は激しい罵り声を時々あげた。だから厳しい取り締まりも受けた。やがて、彼のせせら笑いは、だんだんひどくなり、何事に対してもせせら笑うようになって

た。彼は何事にもずる賢くなり何も信じなくなつた。

彼にとつては、警察官はなんでも悪意に解して行動したし、他の誰でもみんないやしむべき生き物でしかなかった。彼らはみんなジミーを利用しようとした。だから彼は防衛上やむなく彼らといつも喧嘩しなければならなかった。

彼自身は社会的地位は低かったが、それでも個人的には孤独な中にも特異な権威の要素を有していた。彼に言わせると、バカバカしい言動を頻繁にする奴らが市街電車の前方の運転台で騒ぐんだと言った。

最初、ジミーは彼らと喧嘩した。しかしジミーは彼らよりはるかに優っていた。彼はアフリカ牛のように口が堅くなった。彼の心の中に、必死で動き回るカブトムシのように彼に付き従ってくる市街電車に対して強い軽蔑心が芽生えたのだ。

長距離の旅行に出発するとき、彼は高くて遠い目的地をきつと見つめる習慣がついた。それから馬に鞭を当てた。御者たちが背後で騒ぎ立てるかも知れない、乗客が彼を罵るかも知れなかった。しかし、ジミーはふと気が緩んで眠りに落ちていった。彼が目覚めるとは、青色の制服を着た警察官が真っ赤な顔をして手綱を取り従順な馬の柔らかない鼻を叩いていたこともしばしばあった。

ジミーは警察官の彼や友人に対する態度を考えた。そうして、彼は警察官といつてもなんの権力も持たない街の男

に過ぎないんだと思うようになった。彼は仕事で街を行き来しながら、「警察官は街で発生する事件は全て俺のせいにして、俺は現場のお役人の格好の餌食になっている」と思うことがあった。彼はその仕返しに、「厄介なことが起きたり、俺よりも手ごわい相手から強制されない限り、どんな事が起ころうとも決して道は譲らないぞ」と心に決めた。

ジミーにとつて、通行人は身勝手に彼の都合を全く考えない単なるうるさいハエだった。彼らはどうしてあんなに通りを横切ろうとするのか理解できなかった。

彼はいつも通行人の狂ったような行動に当惑していた。彼はいつも御者台から大声を張り上げた。彼は中腰で、通行人が必死で飛び越えたり、突進したり、跨いでいくのを見て怒鳴りつけるのだった。通行人が、ジミーの馬の頭を打ちぶつたり、足を動かしたり、眠っているのを邪魔したりすることがあった。そんなときは、ジミーは、通行人を馬鹿者と言って罵倒した。というのは、彼自身、こんなふうを考えていたのだ。「俺や馬や馬車は太陽の神を乗せた二輪車を道路で妨害できる絶対の権利を持っていて、思うままに伝道を邪魔し車輪を取りはずすこともできると、神ははつきりと言っているのだ」と。だから、神の御者が二輪車から降りて、熱血の拳を振り上げて、激しく通行の権利を主張しても、必ず両手の拳をしつかりと握り締めた敵

しい表情の人物からだちに抗議を受けたに違いない。

二輪車がようやく通る横丁に空を翔るフェリー・ボートがやってきてもジミーはせせら笑ったにちがいない。

それでも、彼は消防馬車には畏敬の念を持っていた。消防馬車が彼に突進してくるとき、彼は恐れをなして馬車を脇道に乗り上げて道を空けた。それを見て、何も知らない人はびつくりすることがあった。

消防馬車が、次々と馬車にぶち当たり、氷の塊を一撃で粉々にするように、馬車が壊れる事故が生じて、ジミーの馬車はいつも脇道に車を持ち上げて無事だった。消防馬車が間近に接近してくると、多くの大型の乗り物を警察官が半時間ほどで怒鳴りつけて交通整理をして道を空けた。

ジミーは消防馬車を恐ろしいものとして崇めていて、それはまさに忠実な犬のようだった。

消防馬車は市内電車もひっくり返すことで知られていた。消防馬車の馬は突進するとき敷石を蹴って火花を飛ばす。

彼にとつてこの馬こそ恐るべき生物だった。ゴングのクランクランという音は戦争を呼び起こすかのように彼の胸に突き刺さった。ジミーは、子供の時から、警察にお世話になつてきたが、成人するまでには新記録を作っていた。

彼は自分の運搬車から降りてきて他の御者と喧嘩をするということを頻繁にしかした。彼はいろいろな多くの喧嘩に加わってきた。警察がよく知っている酒場の喧嘩にも

割り込んだ。

かつて、彼は中国人と遣り合つて逮捕されたことがあった。また、お互いに見も知らぬ二人の女に彼は随分と悩まされたこともあった。彼女らが結婚の事や生計の事や子供などの心配事を持ち込んだのだ。そんなことがあつたにも関わらず、ジミーがしんみりと感じ入つたように言うこともあつた。「今日のお月様つてやけに美しいな」と。